平成26年度学内版 GP　成果報告書

取組名称	アジアで参加型調査法を演習する ー「環境マインドを現場で体験するゼミ（熱帯雨林）」ー
実施組織 （または対象のカリキュラム）	全学教育機構
※連携する他学部・機関がある場合は記入	
実施責任者（所属）	金沢謙太郎　　（全学教育機構）
取組の目標	本取組の到達目標は次の3点である。 ・　熱帯雨林とそこに暮らす人びとの直面する環境問題を現場で調べ、その結果を説明することができる ・　グループワークにおいて、主体的な発言と傾聴ができる ・　自分自身の生活と現地の環境・社会問題とのつながりを理解し、問題解決に向けた目標を示すことができる アクティブラーニング（能動的学修）を促すための手段として、国際協力の分野で実践されている参加型農山村調査法（Participatory Rural Appraisal; PRA）をとり入れ、アジアの現場において現地住民の参加のもとに、学生自身が PRA の手法を演習する。
1． 目標達成のために行った活動と成果 （箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする）	1. 平成 27 年 3 月 1 日から 3 月 9 日にかけてマレーシア、サラワク州（ボルネオ島）への演習旅行に、学部生 10 名、引率教員1名、助手1名が参加した。 2. 3 月 2 日に国際環境NGO（FoE）マルディ支部を訪問し、同地の農林業プロジェクトを視察し、代表のジョク・ジャウ氏とディスカッションを行った。 3. 3 月 3-4 日には、農耕民を中心とするロング・ブディアン村を訪問し、PRA を実施、グループ演習（聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション）を行った。 4. 3 月 5-6 日には、狩猟採集民を中心とするロング・ウィン村に滞在し、PRA を実施、グループ演習（聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション）を行った。 5. 現地での移動には四輪駆動車やボートを利用したが、道中で木材運搬やアブラヤシ・プランテーション開発の様子を観察、記録しながら、貿易を通じた自分たちの暮らしとのかかわりや課題について議論した。 6. 事前教育として平成 26 年度後期の土曜日を中心に計6回集まって、PRA の訓練のほか、現地語や現地事情の学習などを行った。 7. 参加学生は現地でまとめたプレゼンテーション資料に加え、帰国後に演習レポートを作成した。調査助手として同行した NGO 職員や引率教員のコメントをも収めた報告集（冊子）として発行する。

2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望 （達成の度合いを選び，そう評価する理由と今後の展望を記述）	ⓐ 達成できた b. おおよそ達成できた c. 半ば達成できた d. おおよそ達成できなかった e. 達成できなかった	（そう評価する理由） ロング・ブディアン村及びロング・ウィン村で3つのグループに分かれて PRA の聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーションを遂行した。学生たちは、当初は試行錯誤しつつも、次第に自分たちのもつ語学力で的確な質問をし、数値や図表を利活用し、丁寧に議論する方法を学んでいた。引率教員と調査助手は全行程に帯同したが、学生たちは全員、現地 NGO や村長、村人などと積極的にコミュニケーションをはかっていた。異文化コミュニケーション、社会人基礎力、環境マインドの醸成といった教育的な効果は顕著であると感じた。なお、成果の検証には、4月中に発行する演習レポート（報告集）も参考にする。
		（今後の展望） 本取組は、毎年 700～800 名が受講する講義科目「熱帯雨林と社会」のアドバンストコースという位置づけで新規に開講した。参加した学生は 10 名にすぎないが、学生も教員も大きな達成感と手応えを感じた。参加学生には今後も自ら積極的に海外で出て行動してほしい。同時に、今後も本取組を継続してまいりたい。教養講義で芽生えた信大生の環境マインドを本取組によって力強く成長させ、「本学を元気にする」ことを後押ししてまいりたい。